

因に云、文政十三年七月上旬、百樹此地にいたり、渡部氏の客舎にやどりて、温泉に浴したるをりから、主の婦人の物語に、今年春の半、主翁は江戸にいたりて家にあらず、時に甲州の人とて、西郡の一人の老人、娘とて中年の女二人、下女一人、從者二人を具して宿りけるが、翁のいふやう、我は疝氣の病ひあり、いもとの娘に癩の病ひあり、二ツの病症、此湯に妙なりと聞て、はるばるこゝに來りし也、玄かるに此姉に一ツの奇病あり、もし此湯にて治する事もやあらんかと保養かたふ、につれきたれり、その奇病といへるは、六年以前より晝夜眠る事あたはず、神心勞れて見らるゝ、ごとく枯瘦、食すゝ、まずして闇所をこのみ、人に對する事を忌み、時としては心濛々として人事を辨せずして、發狂せるが如か、る病にも、此湯の利申にやと問ふ、婦人答ていふ、今聞へ給ける疝と癩とは、此温泉に浴し給ひて、全快ありし人々許多あれど、六年の間眠り玉はざる病を治したる事は、聞もおよび候はず、わらは、女の身にて、醫療の事は露ばかりも曉し候はねど、眠り玉はざるは、氣血のと、のひ給はざるならん、此いでゆは氣血を補ひ、精心をさはやかにするを第一の功とすれば、こゝろみに浴し給へ、その功能に應じ給ふ事もあるべし、さはりとなる事は、いさゝかもあるまじといふに、翁いかにもとて、是よりかの女に歳ころ入湯させし事、十餘日なりしに、ある日朝食を喰する時、碗をとり二た口三口にして、頻に眠り、持たる碗をはたとおとしたるが、おどろきもせで、ねふければいねんといふに、翁かたはらにありて大によろこび、寐所へ入れて臥せけるに、其日も暮て夜もすがらうまく睡、次の朝も目をさまさず、かくて晝夜三日の間、息ある死人のごとくなれば、翁ははじめのよろこびにかはりて、覺束なくおもひ、主の婦人をまねぎ、玄かゝのよしをかたり、なにはともあれ、三日のあいだ食せざれば、飢ては病にあしからん、起すべきやなど婦人に問ふ、婦人のいふ、六年が間眠り玉はざりしとなれば、一日を一年として、六日臥給ふともくるしかるまじ、そのま、